

3 研究のまとめ

成果と課題

(1) 研究の成果

今回の研究の成果は以下の 3 点です。

①ペア学習という授業形態は、生徒たちに有効でした。

アンケート結果から、得意・不得意の生徒ペアによる学び合いは有効でした。「今後もこのペア学習をした方がいいと思いますか」の質問に、得意な生徒の 53%、不得意な生徒の 62%の生徒が「そう思う」と回答しました。ペア学習では、得意な生徒は自己説明することによりメタ認知能力を育てる高次な思考を行ったと考えました。また不得意な生徒は、ペア学習後の実技課題を回収し評価した結果から、押さえさせたい内容を身に付けることが出来るようになりました。商業科のコンピュータ実習においても、そのことが確認されました。

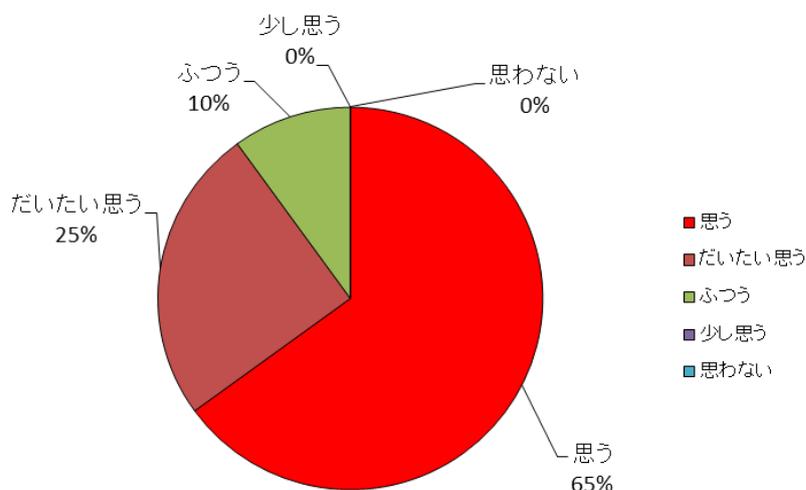
教えられる側の評価が高かったのは、ペアの相手に気軽に質問することが出来ることや、専門的な用語でなく、同世代間での分かりやすい言葉でのコミュニケーションにより、理解しやすい説明が聞かれたためと考えます。

このことから、教師が生徒の進捗状況の見取りがしにくい実技の一斉指導で、実技のスキルの差が大きくなる前に、単元や検定試験などのある程度の期間で区切り、言語活動を意識した生徒相互での学び合いをすることは、効果的でありペア学習は有効であったと考えます。

②教えられる側だけではなく、教える方に効果的でした。

教えられる側だけではなく、教える側にとっても理解が深まったという結果を得ました。教えた側（15名）の理解の深まりについて質問した結果、「ペア学習で言葉を使って教えること（アドバイス）で自分自身の理解が深まったと思いますか。」という質問に対して、「思う」65%、「だいたい思う」25%、「ふつう」10%という結果からも明らかとなりました。これは自分自身の理解を相手に伝えるときに、メタ認知能力を育てる高次な思考を行い、また、相手に伝えるという言語活動を行うことで、より理解が深まり相手が理解したと思うことで、教える側が自己の相手に伝えたいという欲求が満たされたのではないかと考えました。このことから、教える側と教わる側の双方にメリットがあることが確認されたと考えます。

ペア学習で言葉を使って教える(アドバイス)ことで自分自身の理解が深まったと思いますか。



③一斉授業に比べ、実習に対する意欲は増しました。

授業の回数が進むにつれ、ペア学習にも慣れ、積極的な言葉のやり取りが行われ、より活発な言語活動ができるようになりました。クラス全体がとても楽しそうに実習を行っていました。それに比例して生徒たちの実習に対する積極性が増しているように思いました。

(2) 今後の課題

今回の研究を通しての課題点は以下の 5 点です。

①結果を客観的に見取る指標の工夫

今回の授業を通して、生徒のアンケートだけから見れば効果的であったといえますが、やはり生徒の主観に過ぎず、本当の意味で効果が上がったかについては検討の余地があります。もっと厳密に比較対象を数値評価するには、ペア学習前に例題を個人で解かせておき、時間を計測するか、技能の点数化を行っておき、ペア学習後に、同じレベルの別問題を解かせ、時間比較か点数比較を行う方法などのような客観的な検証が必要だと考えました。

②教師側が意図した活動となるようなペア設定

得意な生徒と不得意な生徒の組み合わせは指定しましたが、教える側・教わる側の指定はあえて行いませんでした。それでもお互いの力量を各自の取得検定で判断し、上級取得者が教える側になると考えていましたが、こちらの意に反して、上級取得者が教えられる側となっているペアもいました。

また、毎回交互に役割を交代してペア学習を行っているペアもいました。このことから、ペア設定に関する研究も必要だと感じました。

アンケートの自由記述にも書かれていたのですが、毎回同じペアでなく違うペアで行うことも今後は検討してもよいのではないかと思います。

③ペア設定のためのスキルアセスメント

実技スキルと検定の結果は一概に一致していないことも挙げられます。検定試験は実技と筆記の両方で基準点を満たしていれば合格基準を満たします。つまり、少数ではありますが不合格者も実技は合格レベルに達していることもあるからです。スキルアセスメントを十分に行い、ペア設定を行うことも課題です。